

石橋湛山の人と哲学
—金融学者として、立正大学学長として—

秦野 眞（立正大学）

日本金融学会の本年度春季大会の会場校である立正大学は本年で140周年を迎えるが、本大会の特別セッションのテーマにある石橋湛山は、周知のように昭和31（1956）年第55代の内閣総理大臣に就任した政治家であるが、同時に昭和27（1952）年に立正大学学長となり昭和43（1968）年3月までその職責を果たした大学人・教育者でもあった。特別セッションはかつて石橋湛山を学長とした立正大学140周年事業との共催とするのは以上の理由からである。

石橋に関する今日までの評価は、政治家、思想家、財政・金融（ケインジアン）学者、大学人と多面にわたる。一人の政治家の評価としては特異といってもよい。こうした評価の多面性は、日蓮宗の僧侶の子弟として生を受け、東京毎日新聞を経て東洋経済新報社においてジャーナリストとして文筆を奮い、なお後半生は大学人・教育者を兼ねて政治の世界で頂点に立つというその履歴が背景にある。

この特別セッションは、石橋湛山の評価の多面性に対応して三つの報告が基本となる。第一の池尾報告は、戦後日本の経済再建過程で政策責任者である大蔵大臣としてかつ自らをケインジアンと称し復興金融公庫融資を推進した石橋を、日本研究者としてのアメリカ人がどのように評価したかをモチーフとする。第二の寺尾報告は、石橋に与えられた評価として、リベラリストならびにリベラリズムにかかわる考察である。ここでは石橋が強く影響を受けたJ. Sミルの自由論の西歐的、伝統的な一元論的解釈と対比させながら価値多元主義にたつ個人主義・自由主義を戦前知識人および石橋の思想特性と評価する。第三の早川報告は、政治思想、政治史を専門とする報告者が、本学学長としての軌跡に重ねて日本の戦後の政治過程を辿りながら、石橋の思考の枠組みとして「事実認識における現実主義」と「政策論におけるリベラリズム」組み合わせをその特徴であることを明らかにする。

以上、多様にして多面的な石橋湛山像をこの三つの報告を通じて立体的に描き出すことが本セッションの目的である。